復活日後第３主日　　２０２６年　４月１９日

風のように

甘木教会

主任牧師：崔大凡　　牧会委嘱牧師：竹田孝一

すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。　　ルカによる福音書24:31

【説教要旨】

本日の聖書の箇所は、有名な「エマオ途上の物語」です。

読んでみると不思議な、合点のいかない物語です。なぜ、３年も一緒にイエスさまと生活していた弟子たちが復活したイエス・キリストを分からなかったのかということです。復活の記事には不思議な、理解できない物語が多いのです。

「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。」とありますように、十字架のイエスの処刑によって、弟子たちが期待していたことが打ち砕かれ、駄目になった。自分たちの期待が砕け、挫折した。それゆえに「二人は暗い顔をして立ち止まった。」ということが起きました。

しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかったとは、不思議で、理解しがたいことです。イエスは十字架で死んだという事実に圧倒され、弟子は、絶望の深みに陥れられ、すべてが見えなくなった暗闇の中に落とされたと私は思います。

弟子たちが話しているイエス・キリストに気づかず、分からないままに会話が続いたのは、この絶望の深さではないでしょうか。だから、彼らの顔は暗く、力を失っていました。

現代の時代の変化の中で、世界の情勢をみますと科学技術の発展で未来が開けると思っていました。しかし、この科学技術の発展が、戦争に新たな展開を開き、悲惨な状態を世界に生み出し、AI（人工知能）の発展は人間の存在さえ脅かそうしています。皆が明るく希望をいだいているかというと抱けない状況

が、今です。期待を裏切られることばかり。世界には戦争、テロ、貧困・・などあり、これが簡単に解決できないことに良心ある人は、絶望感に苛まれていきます。

エマオ途上の物語は、イエスの十字架の死によって終わった、自分の未来への失望で満ち、絶望していた弟子たちがいます。そこに、**イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められる**という出来事から始まります。イエス・キリストが、絶望している弟子に近づいてくださる。それも、復活したイエス・キリストが近づいてくださるのです。

椎名麟三というキリスト教小説家がいます。戦前、彼は共産党に入党としますが、治安維持法で捕まり投獄されます。共産党から脱退し、転向をします。朋を裏切ったこと、今まで信じていた政治信念を捨てたことに心の中で深い闇を持ちます。そいうときキリスト出合います。この禿げ頭の、呑み助がどぶに顔をうずめて死んだとて生きたキリストは私を「どうしようもないやつ。来い」と呼びだしてくれると言います。生きたキリストと共にいきることによって心に暗闇を持ちつつも歩みだすのです。

そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明されたと、復活したイエス・キリストが語りかけてくれるのです。苦悩の出来事の中、絶望のあまり**目は遮られていて**いるときもイエス・キリストは共にいてくださいます。

一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった、私たちの命の源である食事、キリスト者にとって聖餐において、イエス・キリストは、姿を私たちにみせてくださいます。私たちの人生がなんであれ、命の中心にイエス・キリストがおられるのです。

ここで、イエス・キリストは、

すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

私たちが目を開くのではないのです。目を開いてくださるのは神です。私たちが目を開いてイエス・キリストを見るのでなく、イエス・キリストが**いてくださり**、目を開いて下さる。

だから、人生において椎名麟三さんが過酷な戦いと絶望の中で、生きている時も「どうしようもないやつ。来い」と呼びかけてくださる。そして、目は開かれイエスのお姿が私たちの人生におられるのです。人生と共にイエス・キリストはいてくださった。ここに不屈な信仰をもって、過酷な戦いと絶望の中で、生き抜くことが出来たのではないでしょうか。

「エマオの晩餐」(1645年)

二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

（レンブラントのエマオ途上の絵）→

二人の目が開け、イエスだと分かった。この出来事が起きてきます。ここに私たちは燃えるのです。そして、すべてが示され、勇気、希望をもって、絶望から私たちを立たせてくださいます。

こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい。また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろいやされるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい。

ヘブル人への手紙12:1～2、12:12 ～13

今日もイエス・キリストは来てくださり、私たちに**聖書を説明してくださいます。ここに真実の目が開かれます。**イエスを見つめつつ、弟子たちが信仰の道をまっすぐ歩んだように時代の大きな、世界が終わりになるのではなだろうかという激動の時代にあっても、私たちも歩めます。「安心しなさい。私だ。恐れずに行きなさ」と送り出してくださいます。

牧師室の小窓からのぞいてみると

「天災は忘れたころやってくる」とあるが、阪神大震災、東日本大震災と続き、まさかと思っているときに、まさかの場所で地震が起きた。熊本である。熊本地震である。あれから 10 年。

熊本に大学、高校、福祉施設、幼稚園・保育園を多くもつルーテル教会の諸施設も大きな影響を受けつつ、教会全体で救済活動を展開した。

地球の中が活動期に入っている時、いつ、どこででも天災が起きてもおかしくない時代にある。また地球温暖化は気候の変化を生み出し、台風、集中豪雨など頻繁に起きてきている。能登地震、能登集中豪雨がダブルパンチで起きた。

主は、「目を覚まして起きなさい」と言われる。それは、天災に目を覚ましておくというよりもいつも、いざというとき愛の業をなすことが出来るように目を覚まし備えておけということではないだろうか。

園長・瞑想？迷走記

超少子化の波を受けて、幼稚園が定員を確保していくには難しい時代にきたが、園児が少ないながら、今年も元気な新入園児がやってきた。

初めての集団生活、集団生活に慣れていないので泣く子、自由に動きまわる子、いくら言ってもこちらのいうことは無視する子、様々である。よくよく、子どもたちを見ているとそれぞれの子どもには論理がある。その論理で動いている。それを知っているといろいろな行動も理解ができ、こちらの接し方も、こちらのとれる行動も予想できるようになる。

一日、一日、保育する現場の先生は気を許せない時であるが、きっと新しい展開がはじまるだろう。

日毎の糧

聖書：わたしは主を愛する。主は嘆き祈る声を聞き、
　　わたしに耳を傾けてくださる。生涯、わたしは主を呼ぼう。　　詩編１１６:1

ルターの言葉から

み言葉と祈りは、悪魔を恐れさせ・・・試練と戦いが来た時に、同じみことばに心を寄せ、神に助けを呼び求めるのは、もう一つの武器です。

『マルティン・ルター日々のみことば』鍋谷尭爾編訳　いのちのことば社

主を呼ぼう

116篇は、「主を呼ぶ」という言葉が繰り返されている。

「そもそも神の名を唱えて祈るということは、人類に普遍的にみられる現象である。古代西アジアの祈祷文にも神名が数多く登場する。しかし、古代イスラエルのヤハウェ信仰者ほどに『神の名を呼ぶ』ことを自覚した民は稀であった。」①

「神の名を呼ぶ」とは、祈りです。神への祈りは「名」を呼ぶことであり、何々ちゃんと名を呼ぶ、人と人との対話の関係のように、神と私たちの人格的対話です。祈りは神と対話することです。私たちはいつも神の前で生き、神と対話して生きる者です。

「いつも喜んでいなさい。**絶えず祈りなさい。**どんなことにも感謝しなさい。Ⅱテサロニケ５：１６－１８」

私たちも「神の名を呼ぶ」ことを自覚した民です。
死の綱がわたしにからみつき、陰府の恐怖にさらされ、苦しみと嘆きを前にして、主のみ名をわたしは呼ぶ。「どうか主よ、わたしをお救いください。」

八木重吉というクリスチャン詩人の詩に「神を呼ぼう」という詩がある。「赤ん坊はなぜにあんなに泣くんだろう ／あん、あん、あん、あん／あん、あん、あん、あん／うるせいな／うるさかないよ／呼んでいるんだよ／神さまを呼んでいるんだよ／みんなも呼びな／神さまを呼びな／あんなにしつこく呼びな」。

①詩編の思想と信仰Ⅱ　　月本照男　　新教出版

祈り:神をしつこく呼ぶ者とされますように。アーメン。

甘木通信

人間にとって最も良いのは、飲み食いし、自分の労苦によって魂を満足させること。しかし、それもわたしの見たところでは、神の手からいただくもの。

コヘレト２：２４

子どもたちを大きくなり、私も忙しくなり夕食が一緒の時間に食べられることが難しくなったとき、朝食だけ家族が一緒に食べることに家内がこだわっていた。我が家では、いつのまにか朝食を一緒に食べるということが自然になっていた。子どもたちが中学から東京の自由学園に入り、家族全員で一緒に食事をすることもなくなったが、しかし、夫婦二人だけであるから朝食は絶対といえるほど一緒に食べている。

沢村貞子さんが人生における食事の時間を算出し、それがどんなに貴重な時間であり、だからこそ、食を丁寧にしたいということを言っておられたことを思い出す。

人生は束の間だからこそ、食事の時間は、貴重な時間であると思うようにこの頃、ますます感じられるようになった。だから、神の賜物なのかもしれない。

主・イエス・キリストも十字架にお架かりになる前の木曜日に食事を弟子たちとし、弟子らと一緒の3年間と言う束の間の時間だからこそ、伝道途中も食事を一緒にしておられる。

「人の子（イエス・キリスト）が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で、大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う」（ルカ7：34）とよく食事をされていることが伝わってくる。食べることを聖とされていたのだろう。

①「それでも生きる　コヘレトの言葉」　小友聡　NHK出版」

（甘木日記）土）入園式など、行事が重なるが、年々いろいろなエピソードの贈り物をくれる。日）礼拝も無事に終わる。月）日善幼稚園は休みだが、休みの先生もおられるので出勤。火）園長・牧師って何かと考える一日。水）幼稚園はイースターの礼拝。卵のカプセルをプレゼント。お菓子が。寒さが戻ってくる。木）松崎保育園で、礼拝後、飾っている花の説明をいただく。今日は「ベツレヘムの花」。土曜日に張る芝がＨさんによって二百枚以上が届けられる。夕刻、主任交代にともない引き継ぎの会合。金）歓迎遠足、zoom 会議。ふと見ると鯉のぼりが飾られている。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。はぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）色々と週報に間違い、変更があり作り直し。先週のハードと今週の入園式、新学期の準備で疲れていたのかもしれない。午後から甘木教会へ。体調も良く、甘木教会の芝生の中に生えた草を手で抜いていく。腰が痛い。先週、抜いたはずの庭も草がもう生えている。それにしても陽射しが強い。落語を聞いてと思ったが、7代目円楽襲名披露口上を聞き、終わり。日）今日も体調よく。庭の早朝掃除、草取り、礼拝後の芝を植える場所の草取りと出来る。これからは草取りが増えてくる。草取りをしているとてんとう虫、団子虫、・・いろいろな昆虫がいることに気づく。久留米に帰って来て、「主管者交代の確認メモ」を作る。

（甘木教会の花壇）

月）幼稚園はフリー出勤だが、休みの先生がいるので、早朝から行くと、二人とも出勤していたので、事務作業をして14 時に退勤する。家内が愛知から来ていた看護士時代の友人が来て家にいないので、自分もどこかに行こうとして駅まで行く。外国人労働者を排除する演説をしている人の周りに若者がいるのに恐ろしさを感じた。恐ろしさのあまり、一人でゆっくりと家で休む。怖い時代になりつつある。火）今日は7時半までには出勤しなくてはいけない。職員が少ないので雑用は園長がと思うが先に先生方が来られ掃除などをしてくださる。午後から雨である。寒くなる。朝礼、終礼と久しぶりに司会をするので戸惑う。園長・牧師の仕事とはと考える。水）幼稚園はイースター礼拝、次々と新学期で出来事が起きる。その度に、もうこんなことから開放されたいと思うが。雨の日、夕刻は寒い。木）松崎保育園で、「職員の聖書の学び」、「礼拝」。礼拝を

終えて、飾っている花の説明をいただく。今日は「ベツレヘムの花」という花の紹介。午後から甘木教会へいき、草取り。この時期は草と葛藤。土曜日に張る芝を信徒さんが届けてくださる。二百枚以上。夕刻、主任交代にともない引き継ぎの会合。金）歓迎遠足、その後は羽村幼稚園の会議。会議中に孫もお爺ちゃんも卒園生というお二人が来てくださり、鯉のぼりを揚げてくださる。幼稚園に多くの人の助けの手が伝っている。息子らが幼い時に遊んでいた幼馴染が久留米に転居し、長男とそのご夫妻と夕食。時の過ぎた恵みをいただく。よく、ここまで来た。